

子どもに寄り添う？ 子どもと向き合う？ 自分と向き合う？

春日井敏之（本学教職研究科教授 臨床教育学）

教育現場で、「子どもに寄り添う」「子どもと向き合う」とよく言われます。では、寄り添う、向き合うとは、子どもとどのように関わっていくことなのでしょう。

ある学会の研究大会が、東日本大震災の年に予定されていたのですが延期となり、9年後に宮城県仙台市で開催されました。その時の全体会シンポジウムで、高校の養護教諭をされていた先生が、「大震災で、家族や家を失った子どもたちが、それでも学校にやってくるのです。その子どもたちに、がんばれとはとても言えず、私は黙って一緒にいることしかできませんでした。そうした関わりが寄り添うことかなと思うのです」と発言されたことが、今でも私の心に刻まれています。

言葉は、このように語る人の生き方や他者との関わりを潜って語られないと、薄っぺらになって聴く人の心に届かないと思うのです。

私は、子どもに寄り添うとは、「子どもの生活、感情、願いを丸ごと受けとめようとする姿勢と関わり」と捉えています。子どもは、家庭や学校でどんな生活を抱えて生きているのでしょうか。子どもには、家庭や学校、保護者や教師の姿は、どうみえているのでしょうか。そのなかで、保護者や教師に対して、どうしてほしいと願っているのでしょうか。また、どんな気持ちで学校に通ったり休んだりしているのでしょうか。一緒にいて、みて、聴いて、感じて、考えてといった関わりを通して、子どもの生活、感情、願いなどが少しずつわかってくると、その子どもに合った支援やケアの方針もみえてくるのではないのでしょうか。

では、「子どもと向き合う」とは、子どもたちとどのように関わっていくことなのでしょう。私が中学校で教員をしていた時に思っていたことは、「どの子どもも見捨てない、切り捨てない」「やれるだけのことはしていこう」ということでした。荒れている子どもに関わろうとしても、無視されたり悪態をつかれたりしたこともありました。その時には、無視や悪態に込められたメッセージは何だろうかと考えました。一人ではわからないこと

も多く、学年の先生たちに相談しました。そして、何が自分にできるだろうかと考えました。話ができるような時には、「なんかあったんか？」「どうしたいんや？」「僕にできることはなんかあるか？」などと尋ねました。答えはたいてい、「別に」「わからん」「なんもない」でした。しかし、短期間で何とかしようと無理をしないで、少し長く付き合っていくと、段々といろんなことを話してくれるようになりました。

このように、荒れていた子どもたちは、外に向けてSOSを発信しているのが、比較的わかりやすかったのです。この間気になることは、自己否定感が強くて自分を責めてしまい、SOSの発信がうまくできずに、自分を傷つけてしまう子どもたちが増えていることです。

ある研究会で、若手の先生から次のような主旨の発言がありました。「今まで、親の期待に応えたい、安定した職に就きたいと思い教師になった。自分は、教師になってもこの数年間『よい子』の延長をしてきたように思う。これまで、自分で決めてこなかったことが多く、教師になっても、やりたいことではなくやるべきことに追われてきた。やるべきことがうまくできなくて失敗したときに、周りの評価を気にして自分を責めて自己否定感が強くなっていった。しかし、ダメな自分を誰にも開示できなくてつらかった。だから、今日のような場が何回も必要だと思う」と。

子どもたちも若手の先生たちも同じような課題を抱えているのです。子どもと向き合うということは、関わり続ける教師の姿勢を意味しています。例えば、子どもの話を聴くということは、子どもにこちらの考えを注入するための導入ではなく、「子どもが安心して自分と向き合う」ことを支援することなのです。同時に、教師にとっては、子どもの話を聴きながら、自分と子どもとのかわり方を振り返り、自分と向き合っていくプロセスでもあるのです。教職大学院の授業やゼミのなかで、そんな機会が生まれていくことも大切ではないかなと思っています。